

令和6年1月10日

## 令和6年慰霊式講話

全校の皆さん、おはようございます。

本日、県教育委員会や本校に関わりのある先生方、本校職員、ならびに生徒自治会の役員の皆さんが代表して参列し『いのちの碑』の前で慰霊式を催行するのに先立ち、全校の皆さんに謹んでお話をいたします。しばらくの間、聞いてください。

平成四年一月十日、本校において、当時高校二年生の小野寺仁さんの尊い命が、同じ飯田高校生により奪われるという、大変悲しい出来事が起こりました。今日一月十日は、わたくしたち飯田高等学校に関わる者にとって、仁さんのかけがえのない命の重さに痛切な思いを禁じ得ない日です。当時、私は教員となって5年目で、中信地区のある高校の教壇に立っていました。全国放送のニュースでこの事件を知った時には、「母校の飯田高校で…」という信じられない思いとともに、身震いするような強い衝撃を受けたことを今でも鮮明に覚えています。

本来、安全・安心が何より保証されるべき学校において、将来の夢に向かって歩んでいた日々、そしてその先にあったであろう未来が突然奪われた仁さんの無念さ、そして朝元気に送り出したはずの息子が、冷たく無言の帰宅をしたことに対する、ご家族の深い悲しみや憤りに思いを致すとき、申し上げる言葉も見つからず、ただひたすらに、御霊のご冥福をお祈り申し上げるとともに、改めてこのような悲しい事件を繰り返さないという誓いを、ここに新たにするとこです。

ご自宅の仏壇の前には、今でも力強い眼差しの仁さんの遺影が置かれています。この悲しい事件から今年で三十二年が経ちます。皆さんにとっては、生まれる前の事件ですが、昨年も触れたように、皆さんのお父さんやお母さんの中には、仁さんと同級生だった方、また仁さんをよく知っている方もいらっしゃるのではないかと思います。言い換えれば、この悲しい事件がなければ、仁さんも親となって自分の子供を本校に通わせて、またご両親は孫の成長を暖かく見守っていらっしゃるかもしれません。この悲しい事件は、そのような未来を、ごく当たり前の日常を一瞬にして奪ってしまったことにもなります。

今日、飯田高等学校に関わるすべての者が、この悲しい事件のことを決して忘れずに、また命の尊さについて深く考えることが、仁さんの御霊をお慰めする唯一のことであると思っております。中庭の「いのち」の碑の裏面には、次のような言葉が刻まれています。

「平成十年一月十日、本校生物班において、上級生により、二年生の小野寺仁君の尊い命が失われる事件が発生した。私達は、この事件で志半ばにしてこの世を去った仁君の霊を慰め、命の尊さを後世に伝えるため、この碑を建立する」

この後の生徒自治会長佐藤君の「慰霊の言葉」でも触れられると思いますが、この悲しい事件を受けて、生徒自治会が出した『高松 92 宣言』において「規律ある学窓」「反暴力」を誓っています。この『高松 92 宣言』は生徒手帳 52 ページに記載してあります。今一度ページを開いて、宣言の内容をしっかりと確認しそして日々の行動に繋げていってもらいたいと強く願っています。

国内では、新年早々に発生した能登半島地震により、犠牲者や被害者、未だに安否のわからない方が多数いらっしゃいます。これから“大寒”に向かうという中、被害に会われた方々のことを思うと胸が締め付けられ、ごく当たり前の日常生活が如何に大切なのかを改めて考えさせられます。また、国外ではウクライナ戦争やイスラエル・パレスチナ情勢により、多くの市井の人たちの命が失われ続け、平穏な生活がいつ訪れるのか、全くわからない状況です。私たち一人ひとりは、命の大切さを改めて考えるとともに『高松 92 宣言』をしっかりと理解、そして遵守して、仁さんが思い描いていたであろう明るく平和な未来のため、行動していくことがとても大切なことであると強く思います。

私たち全員のもことの思いが仁さんの御霊に届きますように、決意を新たにいたしまして、この日の学校長としての講話といたします。

令和六年一月十日  
飯田高等学校長 駒瀬 隆